

「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそ  
うらいき。

## 第10章 念仏の法に、 私の助かるいわれの すべてがある

南第3組 光福寺住職

# 金石晃陽

text by Kouyou Kanaishi

まず、宗祖の語録（師訓篇）の結語である、この第十章を意識してみよう。

人間のたてる義（自力のはからい・理知分別）の決して及ばない、それを超越したところに、念仏の法の義（いわれ・道理）がある。何故なら、言葉として表現することも、解説することも、思いはからうことも不可能であるから、と仰せられました。

生きている限り、自力のはからい（義）を離れることができないのが人間である。それでは、私たちは、念仏をどのように受けとめたらいいのであろうか。

この第十章は、第三章と同じく「おおせそうらいき」で結ばれている。それを受け、異義篇を開く序には、「上人のおおせにあらざる異義どもを」と始まり、異義篇・後序を通して、「故聖人のおおせには」、「聖人のつねのおおせには」と「仰せ」という言葉が何度も語られてある。

以前私は、ある方から、『歎異抄』も『御一代記聞書』も「仰せ」という言葉が数多く出てくるが、そのことをどう思うか、と問われたことがある。その時、気づかされたのは、これまで「仰せ」として語られる言葉が大事であって、「仰せ」は単なる敬語としてしか了解していなかった私であった、ということである。お聖教を学び、よき先生方からお話を聞いてはきたが、「仰せ」を「仰せ」として聞いたことが一度でもあったであろうか。蓮如上人は「仏法を、わが身

にひきあてよ」と語られる。それは、尊敬すべき方の言葉であるから、すべて「仰せ」として聞かなければならない、ということではない。

三帰依文には、「仏法聞き難し、今すでに聞く」とある。「仏法を聞くことは、難中の難である」と。それは、難解すぎるという意味で、仏法に難があるのではない。「仰せ」を「仰せ」として、聞けない私に難があったのである。

「仰せ」を「仰せ」として聞けないあり方を、「自見の覚語をもって」（序）と言われ、「意巧に法を聞く」「得手に法を聞く」（御一代記聞書）ことであると。自分流に意味づけをし、自分の勝手なものさし（人間の義）に合わせて聞いているのではないかと教えて下さる。

思えば、浄土三部経は「我聞如是（我聞きたまえき かくのごとき）」「如是我聞（かくのごとく 我聞きたまえき）」で始まっている。経典もまた「聞書」である。宗祖は、

『経』に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。（信巻）

と言われる。仏願の生起（なぜ阿弥陀如来は本願を発されたのか。無明の生死海に沈淪し、出離することのできない迷いの衆生を救うため）、本（＝因・浄土を建立し、念仏一つをもって衆生を摂取し往生させようという誓願）・末（＝成就・その誓願が衆生の上に成就し、願生道に立たしめる）、そのいわれ（念仏の義＝仏願の生起・本末）を聞く。つまり、念仏の法に、私の助かるいわれのすべてがあって、私の中に、私の助かる因は一つとしてない。

人間は、なぜ迷うのか。それは、「わがはからいと疑心」（人間のたてる義）故に迷う。その事実は無自覚なところから、異義が生まれる。それは、異義八ヶ条で語られる誰かのことではない。「上人のおおせにあらざる異義ども」に、常に義を立てていく自己の姿が知らされる。その悲歎から、「仰せ」にまでなった宗祖に出会い続けていく。それはそのまま、念仏の義に目覚め続けていくことと一つである。そこにこそ、「歎異の精神」があるのであろう。